

毎年確実にやって来る。しかし、沖縄キリスト教短期大学にとって、今年のクリスマスは特別の意味を持っていると思う。それは、言うまでもなく、今年がこのキャンパスでまもなく最後のクリスマスだからである。二〇世紀から二一世紀へと移行行く時代は、キリストの誕生が象徴しているように、キリストト以前とキリストト以後を隔てる一つの時代と区切りを表わしているのと同じである。

「ルカによる福音書」は、イエスの誕生物語を美しく描いているが、特にザカリヤの妻エリサベツとイエスの母となる若い女性マリヤに、特別な役割と神の祝福を与えている。二人の女性は、自分の心も体も、言うなれば、自己の全存在を神に向けて開放している。しかも、マリヤの場合、神の意志に従うことは、ある意味で非難されかねない状況に自分の身をおくことを決意している。

しかし、ここで大切なことは、この二人の女性が神の選びにあらずかり、それに心から服従していることである。

クリスマス祝会への誘い

宗教委員 神山美代子

世の救い主の誕生の知らせは、当時、最も社会の底辺にいた羊飼いたちにもたらされていた。これは、福音の対象がどのような階層の人々を第一に考えられていたかをしめしているように思われる。女性や社会の底辺にいる人々に、福音が重要な役割を与えていることは、当時としては革命的な出来事であったであろう。ここから、新しい時代が始まったのである。

平和を造りだす者としての歩みを考えつつ、クリスマスへの誘いとしたい。

(保育科助教)



クリスマス礼拝・祝会

1988年12月23日(金)

- ・燭火礼拝(献金) 午後6時~7時
- ・祝会 午後7時~9時
- (保1年次による英語のミュージカル・アンサンブル・スピーチ等もあります)
- ・場所はいづれも2号館ホール

YOUTH '88

英語科1年
平良一希

広い、広い、ひたすら広い。水平線のかわりに地平線、ひしめく住宅のかわりにどこまでも続くともろこし畑、犬や猫のかわりにリスやスカンク、そして日本語のかわりに英語。

そんな国、アメリカのイリノイ州、マクソンにおいてその大集会は開催されました。

アメリカ・メソジスト協会の主催で「YOUTH '88」と題された国際集会、参加国十数カ国、参加人数三、五〇〇名余りの中に私も含まれていました。

その集會での私の仕事は、沖縄の中の米軍と、それをとりまく県民の様子を発表し、知ってもらおうことでした。

当時問題になっていた福地ダムでの湖水訓練を始め、毎月のように行われている老練訓練、パラシュート降下訓練、そしてただでさえ広くない沖縄の土地を公然と使用している基地についてフィルムを用いて説明しました。

フィルムは沖縄の一フィート運動事務局から借りて持って行ったもので、大会の後にも何カ所かで



ウェスレイユニテッドメソジスト教会員と一緒に(左端が筆者)

を掲げ、アメリカの三教派(メソジスト教会、ディサイプル教会、福音改革派教会)に直接交渉して、それぞれ一万弗献金の約束を取り付けた。宣教師としての最後の任地沖縄にキリスト教学校を設立する事に、彼は大きな使命を感じ情熱を傾けたと思われる。

前田伊都子宣教師は、本土のキリスト教学校での豊富な教育経験を生かして、キリスト教教育と学校運営に多大の貢献をした。前田氏は専門のキリスト教者だけでなく、大学の運営から学生連の日常の挨拶や言葉遣い、エチケットに至るまで、ユニークな人間教育を行った。彼女のニックネームは「ニコガミ先生で、ここにこそながらガミガミ言って厳しく学生連を鍛けたのである。前田師に泣かされたが若者達は大きく成長して行った。

上映するチャンスが与えられました。大会中の少人数でのディスカッションもとても有意義なものでした。

ディスカッションといっても特別に時間をとってのプログラムというのではなく、空き時間にそれとなく集まった者同士でおしゃべりしているというかんじです。

しかし、そういう些細なおしゃべりや、日頃交わされるちょっとした会話の中から私は、彼らが実際に考えていること、すなわちその大会で発表するために準備されたものでなく、普段から考えて心に持っているものを知ることが出来たのです。

例えば、沖縄における米軍基地の状況を知ってショックを受け、本気で謝ってくれた友がいました。彼は、今まで米軍基地が沖縄を守り、その発展に多大な益をもたらしているのを知っていたのです。

兵役について自分の気持ちを語ってくれた友もいました。

判断は自分に任せられるにしろ

「主我を愛す」、みんなそれぞれ自分の国の言葉で声をはり上げて歌ったのです。感動でした。

毎日の交流を通して、彼らのほとんどは、自分というものを、すなわち自分の考えというものをしっかりと持っていることに気付かされました。日本人との大きな違いではないでしょうか。

大勢の意見のかわりに個人の意見の主張、会釈のかわりに握手、警戒心のかわりに友好心、そんな国アメリカでのわずか一カ月の生活。

一九八八年夏の、大きな大きな思い出です。

「(付)一アメリカ合同メソジスト教会の招きにより、日本代表の一員として本学の平良一希さんが日本キリスト教団より選出され、「YOUTH '88」に参加したものである。

アメリカでは、十八才になると軍隊への招待状が届くのです。心の内側を語り合えたディスカッション、もしかすると、これがいちばんの収穫だったかも知れません。

さて、会のプログラムは順調に進められていき、国際交流の時間がやってきました。

中国の代表、アメリカの代表、西ドイツの代表、皆それぞれが自分の国のアピールをしました。

歌う者、踊る者、語る者、それぞれがそれぞれの国の言葉でそれぞれの文化を紹介するのは実に興味深いものでした。

国際交流のしめくり全員で讚美歌を斉唱しました。

「主我を愛す」、みんなそれぞれ自分の国の言葉で声をはり上げて歌ったのです。感動でした。

毎日の交流を通して、彼らのほとんどは、自分というものを、すなわち自分の考えというものをしっかりと持っていることに気付かされました。日本人との大きな違いではないでしょうか。

大勢の意見のかわりに個人の意見の主張、会釈のかわりに握手、警戒心のかわりに友好心、そんな国アメリカでのわずか一カ月の生活。

一九八八年夏の、大きな大きな思い出です。

「(付)一アメリカ合同メソジスト教会の招きにより、日本代表の一員として本学の平良一希さんが日本キリスト教団より選出され、「YOUTH '88」に参加したものである。



「沖縄キリスト教 学院の創設」

宗主任 金城重明

沖縄キリスト教短期大学は、沖縄キリスト教団(現在の日本キリスト教団沖縄教区)によって創設され、一九五七年四月九日「沖縄キリスト教学院」として首里教会で呱呱の声をあげた。「鉄の暴風」と呼ばれた沖縄戦の惨劇を体験し、精神的支柱を喪失して虚脱状態にあった若者達を、平和の主キリストの精神によって教育し、新沖縄建設の担い手及びクリスチャン・ワーカーとして社会に送り出す事が、その創設の狙いだったのである。

この事は、開学時の「沖縄基督教学院生徒募集要項」に記載されている次の設立理由の文言からも伺える。「われらは新しい沖縄の建設に直向してキリスト教精神を身につけた人材の養成が要であることと確信してこの学校の設立を計画しました。」

沖縄戦によって多数の信徒が犠牲になり、教会堂は破壊され、牧師を失った沖縄の教会にとって伝道者の養成は緊急の課題だった。従って沖縄キリスト教学院設立の動機は、伝道者・牧師の再養成機関設置の必要性であった。それがクリスチャン・ワーカーの教育機

関として発展的に考えられ、更に夜間聖書学校が構想されたが、最終的にはより大きな視野から、キリスト教精神を以て戦後の沖縄再建に貢献し教会に奉仕する若者を教育する機関・キリスト教短期大学として結成したのである。

敗戦後キリスト教連盟から教会の組織化へと始動しつつあった沖縄キリスト教会(沖縄キリスト教団の前身)は、総ての民間団体に先駆けて戦災孤児の養護施設(愛隣園)を設置し、医療事業(移動病院)や幼児教育(相愛幼稚園)にも着手した。沖縄キリスト教団は次のステップとして、大事業であるキリスト教主義高等教育機関の設立を実現させたのである。

沖縄キリスト教学院創設の歴史の契機となったのは、凄惨な沖縄戦であり、敗戦を転機とした過去の誤った教育思想への批判と価値観の転換であった。

敗戦直後宜野座高等学校の初代校長を勤め、後に本学院初代学院長に選任された仲里朝章氏は、宜野座時代に曾っての国粋主義教育へのつまづきと挫折について次のように述懐している。「戦前の皇國の道も廃れ教育勸励の威力失へ

る時代、教育の目標を周辺に措くか全く混沌状況に陥れり。」そして教育者から伝道者への道を歩む中で、「キリストに在る平和教育」を新たな教育の目標に掲げた。

沖縄キリスト教学院の開学は、教会青年に新しい夢と希望を与えたのである。本土のキリスト教短大に準ずるカリキュラム内容で、キリスト教神学の専門科目を設置し、英語にも力を入れる教育を施して行った。

一九五七年四月九日二五名の新生を迎え、首里教会の別館を教室として、週四日制の教育が開始されたのである。地元の両新聞は写真入りで、沖縄キリスト教学院のユニークな教育方針を、入学式当日の夕刊に紹介した。

教会が校舎であり学舎が教会であるという仮校舎時代が数年間続いた。不自由なキャンパス生活を学生連に強いたと言う側面もあるが、その反面教会で生きたキリスト教教育を彼らに施したと言う積極的意義は評価されるべきである。

学生教職員全員が当然の事として毎日の礼拝に参加した。牧師の説教を聴くだけでなく、信徒の教師も講壇を担当し、学生連にもメッ

サーズの順番が回って行った。彼らは真剣に説教に耳を傾けた。彼らと共に少教教育が行われた初期の頃の学生は、仲里学院長宅で共に食事をしながら交わりと歓談の時を持ち、仲里師の人柄に触れるチャンスにも恵まれたのである。

本学は、諸教会と多くの兄弟姉妹・関係者の折りと支えによって設立され、今日までその教育の業を進めて来たのであるが、特に設立者代表の仲里朝章牧師、オールター W・クライダー宣教師及び前田伊都子宣教師三者の本学への貢献は顕著なものがあつた。

仲里学院長はクリスチャン教育者として、理念的側面から沖縄キリスト教学院を支え導いたのである。仲里氏の日記に記されているキリスト教教育の理念についての次の一文は、特微的である。「吾人の目標はキリスト教大学に非ず、「キリスト大学」 活けるキリストに直接教育される大学を云ふ也 決してキリスト教の知識を得る大学には非ざるなり キリストの私塾といふも可なり キリストによりて其感化を直接受けて人格を建造して行く、キリストの教育薫陶を受ける学校は聖書を教科としキリストを教師と仰ぐ学校なり。」

キリスト教の単なる知識伝達ではなく、キリストによる生きた人格教育を彷彿させるものがある。

オールター W・クライダー宣教師は、財政的側面から大きな貢献をした。特に一号館建設に際しては当時一万弗と言う多額の献金

を掲げ、アメリカの三教派(メソジスト教会、ディサイプル教会、福音改革派教会)に直接交渉して、それぞれ一万弗献金の約束を取り付けた。宣教師としての最後の任地沖縄にキリスト教学校を設立する事に、彼は大きな使命を感じ情熱を傾けたと思われる。

前田伊都子宣教師は、本土のキリスト教学校での豊富な教育経験を生かして、キリスト教教育と学校運営に多大の貢献をした。前田氏は専門のキリスト教者だけでなく、大学の運営から学生連の日常の挨拶や言葉遣い、エチケットに至るまで、ユニークな人間教育を行った。彼女のニックネームは「ニコガミ先生で、ここにこそながらガミガミ言って厳しく学生連を鍛けたのである。前田師に泣かされたが若者達は大きく成長して行った。

各種学校「沖縄キリスト教学院」は、一九五九年三月には短期大学に昇格した。当初はキリスト教科だけだったが、保母養成のニードが非常に高まる中で本泉初養成機関「附設保母養成課程」(一九六二年四月)を設置した。その歴史的意義は極めて大きい。

翌一九六三年に英語科・児童福祉科が設置された。広い視野と国際性を身につけさせる為に、開学以来英語教育は重視されて来た。沖縄戦体験を歴史的契機として創設された本学の、「平和を創りだす者」の教育的使命と課題は今後も変わらぬのである。